
さよなら、独房先生。

日賀 巽

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

さよなら、独房先生。

【Nコード】

N7513M

【作者名】

日賀 巽

【あらすじ】

悶々とする思春期反抗期いろいろ真っ盛りの高校生、佐々木比呂と、奇怪な姉、独房先生こと佐々木かれんの奇妙な日常を描いたコメディ（なのか？）ちなみに絶望した某先生とは一切関係ありません。

こんにちは、独房先生

こんなに死にたくなつたのは久しぶりだ。そう思いながら、比呂は布団の中で呻いていた。

現在午後四時。部活はサボった。あいつと顔を合わせたくなかったからだ。多分向こうも自分がいないと分かつてほっとしているだろう。そう想像して、とんだ被害妄想だと思いながらも胸糞が悪くなった。

佐々木比呂。高二。弓道部所属。今日、付き合つて三ヶ月の彼女にフラれた。ので、彼女いない暦一日目。

畜生思い出しても腹が立つ。がりがりと染めたばかりの明るい茶髪をかきまわし、比呂はウォークマンの音量を上げた。流れているロックは、脳のささくれを洗い流すにはあまりにも軽すぎるようだった。

『ごめん、別れてくれる？』

土下座の絵文字付きだった。

昼休み、ケータイを開いて最初に飛び込んできた文面が、これだ。差出人は彼女。

意味が、まったく分からなかった。

昨日帰り道で別れたときは普通だったはずだ。喧嘩もしていない。機嫌を損ねるようなこともした覚えが無い。

比呂は、半ばパニックに陥りながら、『なんで？』とだけ返した。何かの間違いであつて欲しかった。友人の悪戯だとか送信相手を間違えたとか（それはそれで問題だが）、とにかく、自分が想像する最悪の未来を何とか否定したかった。

五分後、返信が来た。

着メロが鳴つた瞬間にケータイを開く。文面を読むうちに、比呂の思考はどんどんと麻痺していった。

そもそも二人が付き合ったきっかけは彼女の告白だったわけだが、彼女が好きだったのは本当は比呂ではなくて、同じ部活の他の先輩だったらしい。その先輩には彼女がいた。彼への想いを吹っ切るために、彼女は比呂に告白したのだという。

で、昨日。家に帰った後、彼女のところにもその先輩からメールが来た。えらく落ち込んでいたので、どうしたのかと聞いたら、フラれた、という。

『それで我慢できなくて告ったらOKもらっちゃった。ごめんね。自分に嘘はつけなかったの。でも、比呂のことは友達として大好きだから』

「ふざけんなああああああああ」

比呂は叫んだ。改めて文を読み返して心底ムカついたので、枕に顔をうずめて叫んだ。枕って素晴らしい。防音性抜群だ。密着させる口を動かすにくいのが難点だが。

思考停止状態の昼休みの自分では『分かった』と返すのが精一杯だったが今は違う。腹の奥底でうずまく何かの頭をぶち破って出てきそうだった。

おいおいなんだよそれ。別れ話をメールするか。一方的過ぎるだろ常識的に考えて。その上俺は代用品か。これまでのメールや何やらでの「大好き」「ずっと一緒にいてね」は嘘だったわけか。まあそれはいいとして彼氏がいる身で告白しに行くのか。なにが『OKもらっちゃった。』だ。最後の一文で丸く治めたつもりか。火に油を注いでるんだよ気付けよお前この野郎！

などと枕に向かってしばらく怒りをぶちまけた後、比呂はぐったりと脱力した。過去の自分にも心底脱力した。

つまり自分は彼女の作った嘘にも気付かずには有頂天になっていたわけだ。その結果が若気の至りのおそろいのストラップやらハートにまみれたプリクラやらのあれやこれやだった訳だ。穴を掘りたい。穴を掘ってあの過去の恥ずかしい自分を埋めたい。

鬱から怒り、そこからまた鬱への負のサイクルですっかり心を消

耗した比呂は、しばらく呼吸も忘れてだらりと布団の中で溶けていた。

もう駄目だ。

割と本気でそう呟いて目を閉じた、その瞬間。

「お困りかな少年っ」

テンション高くずばぁん、と扉を開けて、そいつは姿を現した。

布団から首だけ出してそいつを視界に入れた瞬間、比呂は心の底から、死んでしまえ、と思った。

殺意の対象は元カノからそいつにシフトチェンジ。彼は枕元にあった英和辞典（睡眠導入剤兼枕。オプシオンは乾いた涎だ）を、弓道で培った腕力で入り口のそいつに投げつけた。一瞬のち、うひゃあっという短い悲鳴と辞書が壁に当たって落ちる音が聞こえる。

ちっ。外したか。

「なっ、何をするのだ少年！」

「あんたも何してんだよ姉貴」

「ノンノンノン。私は君の姉ではない」

立てた人差し指を振る鬱陶しいジェスチャーをつけて比呂の言葉を否定すると、姉　紙袋を被ったスーツ姿の小柄な変質者は奇怪なポーズを決めた。

「独房先生見参。君のストレスを捕縛しに来た」

あんたがそのストレスだよバーロー。

比呂は、無言で布団の中に潜り込んだ。

佐々木かれん。比呂の姉。今年で二十歳になるはずなのだが、こいつを社会人と呼んだら他の成人の皆さんに申し訳が立たないと比呂は思っている。

進学もせず定職にも付かず、あっちのコンビニからこっちのコンビニを渡り歩く高等遊民もといフリーター。以前一度お水の仕事に

も手を出したが、気が利かなさ過ぎて三日でクビになったという。

「なんだよもう冷たいなあ無視しないでくれよう」

「ぶーぶーと文句を垂れた後、かれん 独房先生は比呂のベッドにダイブした。かれん自体は小柄なので重くはない。だが偶然肘が鳩尾に入ったらしく、くぐもった「ぐえっ」という比呂の声が布団越しにもれ出た。

「あ、痛かった?」

「急所だよ気をつけろ」

「すみません」

素直に謝ると、独房先生は、ちょこん、とベッド脇に正座した。そのままごそごとスーツの内ポケットをあさり、何かを驚掴みにして枕元にばらまく。

なんとというか、ほのかに漂う香ばしい生臭さ。

「……何、これ」

「にばし!」

ストレスにはカルシウムなのだよ、と胸を張った彼女に向かって、今度は漢字源で攻撃を仕掛ける。

自分が居た空間を水平に凪いだそれをギリギリで避けた独房先生は、きゃんきゃんと高い声で吼えた。

「さつきから何なのさあもう英和とか漢字源とか! 比呂は勉強しすぎだよ! 勉強ばっかしてると脳味噌コンクリになっちゃうよがつちがちだよ!」

「あんたみたいに脳味噌とこてん化させたくねーただだよアホ姉貴」

「ひつどーい、あとノリ悪い。だから我輩は君の姉じゃないんだってば」

「一人称変えても鬱陶しさが増すだけだからな」

「冷たい比呂くん冷たい。冷たい男はモテないぞー。多少暑苦しいくらいが丁度いいんだぞー多分。そうるふるはーとふる!」

「ごろりんごろりとベッド上をローリングする独房先生の言葉で、忘れかけていた事実を思い出す。またも襲い来る鬱の波に吞まれて、比呂は低い声で呟いた。

「っどーせ俺は冷たいですよー……」

「お、どうしたまさかマジで振られたのか少年」

「ごろりんごろりんという布団の上の回転運動が停止。どうやら話を聞く体勢に入ったようだ。

布団に潜っている自分からは見えないが、きっと彼女は目をきらきらさせているに違いない。嘆息すると、半ば捨て鉢になって比呂は口を開いた。

自分の中だけで悶々とさせておくよりはマシな気がしたのだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7513m/>

さよなら、独房先生。

2010年10月8日12時11分発行